

小平在住。在勤・在学の女性を訪ねて、そのいきいきした様子や元気の素を伝えます。



いきいきレディ33

始まりは図書ボランティア：大杉 和美さん (小川西町在住)

大杉和美さんは、息子さんが小平第六小学校に入学した1998年の秋、「図書ボランティア」を6人で立ち上げ、本の読み聞かせ、本の整理と修理、図書室の飾り付けなどの活動を始めました。授業が始まる前の15分間、子どもたちに本を読み聞かせたり、紙芝居をしたりしたそうですが、この時間は親にとつてとても忙しい時間です。にもかかわらず、活動する仲間が年々増えます。どうして増えたのでしょうか？

親にとつてはいいことばかりなので。「図書ボランティア」を立ち上げた大杉さんは、「図書館協議会」に参加し、市内の小学校の図書をデータベース化する事業に参加します。予算不足で事業はとん挫しますが、大杉さんたち六小の「図書ボランティア」は頑張つて、六小のデータベース化を実現します。驚きです。さらに、他の小学校にも行って図書のデータベース化を手伝い、市内19校全部のデータベース化をやりとげたそうです。今、メンバーが70名になって、学年を超えた親同士の交流も盛んになり、活動も充実しています。

小川村の復元模型をつくる

小平市の市制施行50周年に向けて行われた「市史編さん事業」では、「図書館協議会」で知り合った蛭田廣一さんに誘われ、「江戸時代初期の小川村」を復元した模型づくりに携わりました。二級建築士でもある大杉さんは、職業能力開発総合大学の学生さんたちと一緒に、細かい根気のいる作業の末に完成させたのです。この模型は現在、小平ふるさと村の「旧小川家住宅玄関棟」に展示されています。さらに、玉川上水から小川用水に分岐する地点の水門の模型をつくつて、市内の小学校で授業もしているそうです。

社会教育委員など、いろいろな顔を持つ大杉さんに、どうしてそんなパワーが出てくるのか？聞いてみると、「生まれも育ちも下町のおせっかいなおばさんだから、人に喜ばれるのがうれしいの」と、答えました。

「表紙作品づくり」

普通の彫刻作品は、角材で作った芯棒のまわりに粘土をつけて形を作っていくが、中山氏の作品は角材と粘土の関係が対等になるように、お互いの役割を交換しながら形と構造を作るよう考えているそうだ。

『ひらく』の趣旨に則して見るならば、普通に芯棒の入った彫刻は素材同士の関係がある意味男性優位社会のようなものになっており、中山氏の作品は粘土と角材のジェンダーが対等になったような彫刻作品であるといえるのではないだろうか。

中山氏は彫刻作品制作の傍ら、市内で子ども向けの



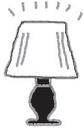
中山氏のアート造形教室

アート造形教室を主宰している。幼稚園児から小学生まで幅広い年齢の子どもたちを対象に、工作をしたり、絵を描いたり、時には絵具まみれになって、「ぐちよぐちよ」「どろどろ」「べとべと」といった大切な感覚を楽しんだり、さまざまなカリキュラムを行っているそうだ。頭とからだ、思考と感覚、全てをフルに使って楽しむ、子どもにとつて秘密基地の様なドキドキさせてくれる空間に違いない。



当日の撮影風景

アーティスト 中山雄一朗
写真 長塚 秀人
撮影場所 小平市中央公園



『ひらく』の書棚

小平市男女共同参画センター“ひらく”にある本の紹介です。本は借りることができます。



『性と法律』

— 変わったこと、変えたいこと —

角田紀子 著

△右波新書

820円＋税



弁護士である著者は、仕事で実際に「法律の女性への冷たさ」に直面し、何とかしなければならぬ、と考えていました。

戦後の新憲法の下、男女は平等になっただけで、現実社会は昔の家族制度の意識のままの人々もいたり、職場でも不利益を受けたり、離婚、ドメスティック・バイオレンス、セクハラ、性暴力など、女性にとって不平等な現実が多いのです。勇気ある女性たちの闘いとともにより少い社会意識を変えてきた様々な実例が書かれています。

(A)

『自分に気づく心理学』

加藤諦三 著

△PHP研究所

476円＋税



人づきあいがいまいかない理由、絶えず心を襲う不安や不機嫌の原因は、心の奥底に抑圧された「依存症」にあります。自分の中で満たされていなかったものに気づき、偽りの生き方を止めたとき、新しい人生が開けます。

本書は、現代人の心の深部の歪みを、幼少期の親子関係までさかのぼって解明し、自然のままに生きることの大切さを説き明かし、生きている実感がよみがえる心の手引書となります。

結局、人間は実際の自分に気づかないこととでいろいろ苦労していると思われ、自分に気づくことは、自分の周囲の人に気づくことでもあります。自分が変わるといふことは、自分をとりまいている世界が変わることでもあります。そんなことが解き明かされる内容の本です。(J)

『脳がわかれば世の中がわかる』

— すべては、ここから始まる —

栗本慎一郎、養老孟司、

澤口俊之、立川健二 著

△光文社

533円＋税



●ヒトの脳は、なぜ進化したのか

「付け加わって」進化した哺乳類の脳

●「脳化社会」へ至った人間

(脳が違えば現実(世界)も違う)

●世界は言葉のなかに存在する。

(人間は恋する動物である)

この本は、心、言葉、意識、社会など、あらゆるものを生み出す脳の働きがわからなければ人間など理解できない、ということが平易に書かれています。(I)

『続・人間のふしぎ』

なぜ？ どうして？

村山哲哉 監修

大野正人 原案・執筆

△高橋書店

972円＋税



子どもの素朴な疑問を通して、人間の心の本質に迫る「こころの教科書」。

心に関する本は、世間に多くあふれていて、それだけ私たちは人の心や行動に関心があるのかもしれませんが。この本は、自己肯定感が低下したといわれる今の子どもたちの現状をなんとかしたいと、教育者である著者が子どもにわかりやすい言葉で丁寧に解説したシリーズ本。

「どうして、男の子がスカートをはいちゃダメなの？」

ダメではありません。へんに見えるというの、見る人の中に「ふつう」があるから。さらに「ふつうって何？」

「しあわせになるには、どうしたらいい？」
「自分って何？」と、答えに困る普遍的な疑問まで。答えを知るのも楽しいが、この本を読んだときに出てくるたくさんの方々の気持ち、考えたことを大切にしてほしい。いろいろな人の気持ちに触れると、自分とは違うしあわせの形も見えてくる。忘れた頃にまた読みたいと、大人にも思える1冊です。

(Y)



行って
みました

津田塾大学公開講座「女性学」

正規の講義を私たち市民が聴ける公開講座「女性学」が行われている津田塾大学小平キャンパス5号館5102教室に行ってきました。

次への一步を踏み出させる内容が素晴らしいかった。



「女性学」前期(全14回)の講義は、女性だけでなく両性を絡めた新しい「ジェンダー史学」という視点が、ことさら面白く感じました。

たとえば、第3回～第4回の「人口と産業から見た主婦」の講義では、日本と外国の歴史や政策を較べながら専業主婦という役割の誕生について学びました。そこでは、いかにも国の経済成長政策や社会制度が「男は外へ、女は家に！」という性的役割を形づくったかを知ることができました。ところが、今や、適齢期の男女が結婚して、男性は外で働き女性は家事や育児に専念することは、すでに当たり前の時代ではなくなっています。社会が変われば当たり前でなくなるのです。

その他に、従軍慰安婦問題がなぜ、中国で関心が薄かったのか？DVの問題では、なぜ親しい関係の

女性に暴力をふるうのか？など、テーマ毎に立てた問いをひも解きながら進む講義は、これまでにない関心を私に広げてくれました。

講師の姚毅(ようき)先生は、この講義の中で「規範」という言葉を何回も口にしました。あらゆる制度にジェンダーは組み込まれているということ、そして、普段、私たちが当然と考えていることが決して「当然ではない」ということを、感覚だけでなく、はっきりと認識せねばならないと話されました。

私は仕事で男女問題の相談にのることが多いので、晩婚、非婚、同性婚、少子選択、非産など、人生の選択が増えつつあることを実感しています。姚先生の講義は、「男らしさとは？女らしさとは？

平等とは？」から「より自分らしくとは？」へ、次への一步を踏み出させる内容が素晴らしいかった。多様な価値観の時代にふさわしい講義でした。(N)

津田塾大学の公開講座「女性学」

津田塾大学の公開講座は本来、学生のために行っている講義を市民との交流を願って公開している講座です。研究の成果を地域に還元するため1981年より始まり、2012年からは年間2万円の受講料が無料になりました。「女性学」の講座は、「いろいろな視点で女性学を見直し、学び直すことで新しい可能性への気づきになれば…」と、行っているそうです。キャンパス内に保育所があり、聴講の方も有料で一時利用できますので子どもがいる女性も参加できます。9月18日から始まった後期の講義は、城西国際大学大学院教授の魚住明代先生が講師で、フェミニズム運動の歴史と理論を学んだ後、現代の女性が抱えている問題について考えます。

問合せ：津田塾大学教務課
電話 042-342-5130
HP <http://www.tsuda.ac.jp>

私も行ってみました

- ◆ こんな難しい講義を学生たちは理解しているのだろうか？(驚!)…そんな疑問は無用のようです。講師も驚くほど素敵なレポートを出す学生も少なくないそうです。学生はそれぞれが考え、答えを見つけて社会に出て行く。女性が男性と力を合わせて社会に貢献する時代、彼女たちが活躍する日が楽しみになりました。(Y)
- ◆ 小平に来て？10年、仕事をしたり、結婚して家庭を持ったり、子育てをしたり、いろんな経験をしてきた私にとって、この講義は「そう、そう、そうよね」と、うなづく内容でした。若い学生たちには難しいかもしれないけど、私にはとてもよくわかりました。教室には男性もいて、他の講座にはない空気がとても心地よかったです。(T)

ひらくはココにあります。

男女共同参画センター“ひらく”、公民館(11館)、図書館(11館)、地域センター(19館)、大学(7か所)、福祉会館、総合体育館、児童館、健康センター、市役所1F・2F、東部・西部出張所、郵便局(17か所)、市内各駅(7か所)、ふれあい下水道館

- 小川町 多加茶、手作クッキーの店歩、商工会館、JA 東京むさし、小平警察署、小平消防署小川出張所、南台病院
- 小川西町 佐野商店、たましん小平支店、NMC ギャラリー
- 小川東町 ギャラリー青らんぎ、フレッドファクトリー 510、カフェ Air エール 上水本町 アトリエ・バンセ
- 津田町 ハタエコンサーン、ハーティハーティ
- 学園西町 ビューティサロンサンローズ、梁里館、美容室ヘアアグラシユ、本間歯科、ヘアサロンサンライズ、あかね薬局 床屋のけんちゃん、笹間住宅資材
- 学園東町 日本堂文具店、梅の里、アクティブスタジオ、りそな銀行小平支店、たましん一橋学園支店 東京都民銀行小平支店、おだまき工房、きそ歯科クリニック、ふく歯科、寝具センター丸新、美容室 Je 学園東町接骨院、とりあん
- 美園町 多摩済生病院、カフェラグラス、珈琲の香、POEM、永田珈琲、ルネこだいら、小平駅前クリニック、シャンブル、子育てサポートきらら
- 仲町 小平消防署 大沼町 がすミュージアム
- 花小金井 風のシンフォニー、公立昭和病院

編集後記

編集という作業に初めて参加させていただき、表紙から始まり細部にわたり全員で意見をぶつけあい、楽しくできました。長くやったなあ…という達成感があります。(Y)

「ひらく」に携わるようになってから、さまざまな場で活躍されている素敵な女性に出会い、多くの刺激を受けました。これからも新しい出会いを求めたいと思います。(A)

真っ昼間、自転車で転倒して道路に尻もちをついたら立ち上がれなくなって、救急車で病院に運ばれて18日間入院。そんな私を再び立ち上げさせたのは、LOVEです。(K)

小平市男女共同参画センター 最近の動き

センター便り・復活No.1

開設10周年を迎えた、小平市男女共同参画センター“ひらく”で、6月23日と28日、「生き方、働き方」について、お茶を飲みながら気さくに話せる「ワールド・カフェ」が、こだいら参画の会と小平市男女共同参画推進実行委員会の共催で開催されました。

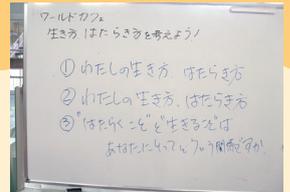
6月21日午前10時半から2時間行われた「カフェ」には女性15名、男性4名が参加。28日午後1時から2時間行われた「カフェ」には女性11名、男性4名が参加。4、5名で1テーブルを囲み、話し合い、進行を担当するファシリテーターに促されてテーブルを移動して、参加者全員と話す「ワールドカフェ」。参加者は、初対面の人と



も気楽に話せました。

男女共同参画を進める活動をしている人が半数以上でしたが、話してみると活動をしていない女性が語る、何気ない話に参加者の多くが引き込まれました。本当はやりたい仕事があるのだけれど、家事をしながら仕事をしているとか、暮らしてみたいところがあるけれど夫の仕事の関係で移住できないとか、同窓会に行くとう働いている女性が多くて、専業主婦であることに引け目を感じるとか。

そんな課題を話すと、「そうね」と聞いてくれる人、「こうしたらいいじゃない?」とアドバイスしてくれる人。性別や年代の違いを越えて話合うと、課題を解決する道が開ける気分を参加者は味わった感じでした。



あなたの明日をひらく相談室「どうしたらいいの?」

Q やさしかった夫が暴力をふるうようになって困っています。結婚してから夫はやさしくしてくれていたのですが、50代半ばを過ぎた頃、私がベランダで外を見ていたら夫が後ろから私の首を絞めてきたのです。

夫は「君が飛び降りるんじゃないかと思って止めようとしたら、手が首に…、ごめん」と、謝ったんですが、そんなことをする人じゃなかったの、びっくりしました。それから私の何でもない言葉に怒ったり、手を上げたりするようになりました。

親友は「心療内科にでも連れて行ったら?」といいますが、夫が素直についてくるとは思えません。どうしたらいいのでしょうか?

(いくえ・51歳)

A 優しくパートナーの変わりように、さぞ不安で辛いお気持ちになっていらっしゃることでしょ。これまでの経過から本人なりに大き

な悩みを抱えてらっしゃるように想像します。まずは、ご夫婦にとって少しでも気持ちが和らぎ、笑顔になれるような生活環境を整えながら、2~3週間パートナーの様子を静かに観察されることをお勧めします。

そのときは彼の応援団になったつもりで根気よく笑顔で接してみることがコツです。それでも彼が変わらず怒りつづいたり、不眠や食欲・体重の増減、趣味やし好のなど体調の変化がみられるようなら病気の可能性もあります。

もし診察へ本人の同意が得られない場合は、保健所の「こころの健康相談」窓口などで専門家のアドバイスを受けることもできます。ぜひ相談してみてください。

(カウンセラー 笠原ノリ子)

Q マタニティ・ハラスメントという言葉を最近、テレビで聞いたのですが、どういうことですか? 私は、結婚するときも「仕事を続ける」と夫に言って結婚しましたし、子どもができて仕事も続けるつもりでいます。今の仕事はやりがいのある仕事ですし、子どもができたからお金もかかるから仕事を辞めるわけにいきません。でも、妊娠したことがわかると、会社でいろいろあるらしいですね。わが社では聞いたことがありませんが、本当にあるんですか?

もし、そういうことに遭ったら、どうしたらいいのですか? 仕事を続

けるために何をしたら、いいのですか? 教えてください。

(悠美・28歳)

A マタニティ・ハラスメント(マタハラ)とは働く女性が妊娠・出産をきっかけに職場で受ける不当な扱いや嫌がらせのことです。昨年の調査では妊娠して働く女性の4人に1人が職場でマタハラ行為を受けたと答えています。

法律で職場支援制度が導入され解雇や雇用止めは減っていますが、実際には「職場に人手が足りないなか、2人目を妊娠したが、会社に切り出しにくく悩んでいる」「重い荷物を持ちたり長い立ち仕事辛いということを上司が独身のため理解してもらえない」「残業を断ると同僚から『正直言うと妊娠は迷惑なんだよね』と言われショックを受けている」など精神的・肉体的な負担、退職につながるデリケートな問題も起こっています。

社員全員が制度について理解していないとマタハラが起こる原因になるのです。防ぐにはまず会社の支援制度の運用や妊娠・出産・マタハラ・社員の声について知ってください。広報や学習会などを利用してもしよいかもかもしれません。トップから社員までコミュニケーションしながら会社全体に周知と啓発が広がることが幸せな環境づくりにつながると思います。(カウンセラー 笠原ノリ子)

ひらく

第35号
平成26年11月発行

発行/小平市次世代育成部青少年男女平等課
☎ 042-346-9618 FAX 042-346-9200

企画・編集/男女共同参画推進実行委員会

安食世津子 岡 武左 北川 紘二
酒井 愛 岸 和夫 高橋 雅子
寿福院美屋子 吉岡 博江 吉村 順介